

本興寺だより

令和四年
三月
第三一 号

「人の心は水の器（うつわ）に従うがごとく、物の性は月の波に動くに似たり。・・・魔来たり鬼来るとも騒乱する事なかれ」
（宗祖 聖愚問答鈔）

ロシアがウクライナに侵攻しました。「戦争」は誰もが嫌うこと。「平和」とは誰もが願うことです。しかし現実は今でも世界のあちこちで内紛、内戦、戦争等が絶え間なく起こっています。平和を望みながらも争いまで突き進む人間の性（さが）を感じます。

人は皆自分の考えは正しいと信じて行動しています。個人も集団も国家も。組織が大きくなるほど硬直化します。ロシアのように一人の指導者の命令で世界に大惨事をもたらしても、「自分たちの正義」という錦の御旗を振りかざして後ろに引かないのです。

仏様は、他人を犠牲にしても自分の正義を押し通す心は、実は地獄の心であるが正義を隠れ蓑にしているため、そのことに気付かないのだと云われます。人間は皆この心を少なからず持っているのです。

全ての争いは自分の「正義」と他人の「正義」のぶつかり合いから生じます。戦争も国家と国家の正義同士の衝突です。他人とのトラブルもそうです。「本当

けることは、自身の器を決めて、そこに自分を閉じ込めてがんじがらめにする事です。

心は本来きまつた器はないのです。水のように、水源の始まりは一滴でも、小川となり、大河となり海に注ぐように、どこまでも広く、大きく浸透していけるのです。心は水のように時には悲しさで冷たく水のように固まり、時には楽しさで暖かいお湯ともなります。

自分の強固な信念の器を捨て去り、いろいろな心の想いの時に素直に仏の教えに聞き、智慧を頂き生かすことが大切だと云われます。

辛いことでも自己の頑なな信念の器を離さず心が動揺したままだと、見えるもの全てが、波に浮かぶ動く月を見るように、物事の真の姿が見えないと云われます。そういう気持ちの時に、心に魔や鬼が外から入り、心がいつそうかく乱されるのだということです。

人は無意識のうちに、楽しいこと、好きなことを寄せ集め、嫌なこと、辛いことを遠ざけようとしています。仏様は心の幸せ、崩れない幸せを得るには、人生で経験、体験することは全て善智識（Ⅱその人にとって意味のある大切な学びが含まれている）であると知り、そこから気持ちが逃げないことだと云われます。

法華経に「不染世間法 如蓮華在水」（世間の法に染まらないこと 蓮華の水にあるが如し）とあります。美しい蓮の花を咲かせるにはドロドロの泥を含む汚

は自分の方が悪いけど・・」と思つて争う人はいません。個人の悩みや心配も、人間関係も自分の正義に固執しすぎるあまり多くの苦を感じるのです。

その結果自分の能力、性格や行動に自信を無くし、どうしようもない不安や悩みで心が塞がれることがあります。自分の思うように変われない自分、変わらない現実に自分を責めたり、反対に他人や社会のせい

に転嫁する気持ちを持つたりします。

この気持ちが高じると、己に向くと自死へ、他人に向くと犯罪を犯す危険があると云われます。

仏様は、如何なる時でも、人は現状の自分を大きく変えられるのだと教えています。

日蓮聖人は冒頭の文のように、人の生き方を水から学べと云われます。

水は万物に限りない恩恵を与える寛容性があり、あらゆる生命の泉です。

水は少しでも高い地位を望む人と違い、ひたすら低い方へ流れようとする謙虚さがあります。

水は、全てを洗い流し清めていく清浄性があります。水は器ごとにその形を変える柔軟性があります。

仏様から与えられた魂（根本の命）は、水のように、本来寛容さと謙虚さと清らかさと柔軟さを持ち、他人と助け合い、和して協力して生きることが求められているのです。

自分の性格を「私はこういう人間なんだ」と決めつ

れた水が必要なのです。澄み渡る綺麗な水では、ここまで美しく大きな花は咲かないのです。

例え意に沿わない汚れた環境や人間関係に身を置いても、その汚れに染まらず清く生きる心や姿が大事なのです。ましてそれらに染まり、自らの心に怒りや愚痴などの汚れた気持ちを生じさせてはいけません。

ひな鳥が殻を破って出てくるのは、この世で大きく羽ばたくためです。殻の中に居続ければ死んでしまっ

ます。人も何時しか自分流の殻に閉じこもっていることに気付かず自身の本来の力を発揮出来なくなり易いのです。自分が信じる「正義」に凝り固まつた殻（器）を破り、鳥が空

に飛び立つように、大きく大らかに伸び伸びと生きる術をつかみなさいと言われています。

人生という旅路を歩むには順風満帆の時はい少ないのです。苦が重なればトンネルに入ったような暗闇と感じる時もあります。しかし立ち止まらず常に前を見て進めばトンネルには必ず出口があり、そこには外からの光が指しています。

まもなく春のお彼岸です。ご先祖は皆、子孫の幸せを万感の想いで願つて逝かれます。その心と感謝を忘れず日々生きる時に、ご神仏とご先祖からのご加護の光が指していることに気付けるのだと教えています。

合掌 本興寺住職 中 谷 聰 秀

